絶対にありふれてはいけない職業は世界最恐

ムリエル・オルタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただ異世界でオリ主が無双するの小説を書きたいだけだった。反省も後悔もしていない。批判も受け付けない。だって、ノリで書いてるから。

～あらすじ～

神様転生ではなくお星様転生させられた主人公はずっと世界と人理を見ていた。

しかし、突然の異世界召喚によりその日常は崩れ去った。神エヒトの存在。魔族、反逆者。様々な謎をすべて力で破壊する。

目次

プロローグ ―― 1
異世界召喚　ステータス ―― 8
英霊召喚　決別 ―― 14
嫌な予感　吸血鬼 ―― 26
オルクス大迷宮　悪意の顕現 ―― 33
迷宮の地下　悪意の代償 ―― 40
迷宮の地下　現状確認 ―― 43
迷宮の地下　再会 ―― 47
迷宮の地下　目覚め　上 ―― 53
迷宮の地下　目覚め　下 ―― 58
閑話　クラスメイトから見た吸血鬼同級生A視点 ―― 63
閑話　とある年のクリスマス ―― 67
迷宮の地下　出発 ―― 71

プロローグ

「聞いてくれ、ハジメ。ついに家の父が死んだ」
「へぇ～……えぇ!?」
　ある日、学校でそんな会話があった。周りの僕の近くに居た人間は驚いたような顔をするが基本僕はスルーを選択する。理由?面倒だから。
　僕が話しかけたのは南雲ハジメ。僕の唯一の友人である。うん。別にボッチでは無い（ココ重要）
「そして聞いてくれ、ハジメ。父の最後の言葉何だったと思う?『ちくわ大明神』だぞ?正気を疑った。まぁ、その後息を引き取ったのだが」
「ブフォッ」
　ハジメは吹き出した。だってそうだろう。まさかの死ぬ最後の言葉が『ちくわ大明神』だ。むしろ笑わずに居た僕がおかしいのだろう。たぶんそうだ（適当）
　そんな雑談（にしてはチョイスが酷いが）をしながらバックから一冊の本を取り出しハジメに渡す。
「それと、以前借りた本だ。確かに面白かった。皆で楽しませて貰った。ありがとう」

「え？……あぁ！他の家族の人と楽しめたんだね！それは良かった。勧めた僕も鼻が高いよ」

かなり間が開いた後、ハジメは笑みを浮かべながら僕が渡した本を受け取り鞄にしまう。彼女としてもこんな場所にこんな格好居るのは不本意だろう。

ここで説明だが先程僕が『彼女』と表したのは僕の目の前で次の本を紹介している南雲ハジメである。彼女は僕がコレまで視てきた人間の中でも不幸の類に入る人間だ。まず、性別が女なのにも関わらず名前はハジメ（本人は気に入っているから別に良いが）だと言うこと。次に、何故か戸籍では男になっていること。どうすれば男になるのか僕も分らない。ＤＮＡ鑑定はしたのかね？まぁ、本人曰く親が間違って男の方に丸を付けてしまったのが原因らしい。何故訂正しようと思わなかった。コレガワカラナイ。

そしてそのままズルズルと時は過ぎ、気付けば高校一年生。コレは酷い。かく言う僕は血の匂いで気が付いた。男と女では少しだが匂いが違うのだ。僕達はそれを機敏に察することが出来るのだ。

そんな事を考えている間に僕達の近くにこの学校で人気の高い白崎香織が近づいてきた。

「バートリー君、南雲君、お昼ご飯食べた？」

「あぁ、先程済ましたよ。ハジメはどうだ？」

「あ、僕も今さっき済ませたよ。天之河君達と食べたらどうかな？」

そう言いながら銀の袋を取り出した。それ、ウェダーｉｎゼ●ーだな。僕はトマトジュース（意味深）だ。人間の食事は僕にとって余り意味の無いものだからな。

「えっ!?お昼それだけなの？駄目だよ、ちゃんと食べないと！今回作り過ぎちゃったし、私のお弁当分けてあげるね？」

１００％善意なので断り辛い。横のハジメを見ると此方も「勘弁してくれ」と小声で言っていた。分かる。その気持ち凄く分かる。そもそも、僕の現在の設定では少し病弱な外国人なんだが……。

ついでに、ここで僕自身の自己紹介と行こう。僕の今世の名はフェリド・バートリー。しがない転生者だ。まぁ、ネットでよく見る神様転生なんて生ぬるい物では無く、お星様転生だ。さて、お星様転生とは何か。簡単な話だ。この星の意思。世界の意思による輪廻転生の逆行。還る筈の魂を押しとどめその魂を加工して星の存命のための歯車の一つとする。それがお星様転生。

まぁ、かく言う僕は別の世界から来たような物だ。この世界を確認したが魔術があるわけでも無く、かつて魔術が神代が栄えたわけでも無い。そもそも、僕の記憶ではそれらは全てフィクション。小説の一設定に過ぎなかった。そんな世界から魂で連れてこられた僕は星に直々に聞かれたのさ「星の永続の歯車になれ（直訳）」と。

そんな話をいきなりされて僕も何を血迷ったのか。まぁ、あの時の僕は限りなく狂人に近い思考回路をしていたと思うよ。僕は星に「今から言った事が出来るなら始まりから終わりまで星の観測でも人理の選定でもやる」と言ってしまった。我ながらかなり命知らずな事を言ったと思っている。いや、そんな気楽な感じでは済まされないのだが。その時は適当にふっかければ良いだろう。なんて考えていた。死んだ後に見る夢か走馬燈ついでに見ている妄想位の認識だったのが原因だったのだろう。

内容は「終わりのセラフの吸血鬼第七始祖フェリド・バートリーの能力、容姿。鬼呪装備全種（認め済み）。英霊憑依（意識はあるし自分の意思で動かせる。つまり、デミ・サーヴァントに近い。それかプリヤのインストール）英霊召喚（全鯖。それが私の夢だった。実際、全部召喚できる）」だ。正直ふっかけでえげつない能力を頼んだものだと思う。なにせ、自分がこんな事になるなんて微塵も考えなかったのだ。時を戻して殴りに行きたい。

どうせ出来ないだろうなんて高を括っているとお星様はやりやがったわけで。僕は晴れて星の代行者。人理の選定者となったわけだ。代行者は何をするのかというと主に星の存続に関わる出来事が起きればそれを破壊しに行く。星に害をなす存在が居れば滅ぼしに行くだけだ（ピクト人がコレに該当。アレは人類と呼んじゃいけない）。僕はこうして転生したわけだが。ただ観察しているだけでは面白くないので人間の中に

紛れることにした。この体は血を吸血することで命を繋いでいるため、人間の世の中に居る方が何かと都合が良いのもある。

「────────ド、────────リド、フェリド!?聞いてる!?」

「んん??すまない。聞いていなかった。それで、なにかな?」

「いやね?どうにかして白崎さんのお誘いを断る手立てを考えて欲しくて………」

どうやら過去の回想で周りの話を聞いていなかったらしい。ハジメに何回も呼ばれていた。

それにしても白崎をどうやって引かせるか…………ね。かなり難しいことを仰るものだ。

僕がどうしたものかと頭を悩ませていると悩みの原因白崎の後ろから三人組が歩いてきた。この学校の王子様とお姫様それに従う騎士みたいだ等としょうもない感想が頭の中で上がる。

「貴方達も大変ね。それと、おはよう」

「あぁ、おはよう。そう思うならどうにかしてくれても良いんだけど」

「あ、あははは………」

疲れ切った僕の返事にハジメは苦笑いしていた。そして僕達に話しかけてきたのは

天之河何某の取り巻きが一人八重樫雫。剣道女子で実家も剣道の道場を開いているとかなんとか。髪はポニーテール。キリっとした顔立ちで男女共に受けが良い。

天之河何某。名前は苗字だけは辛うじて覚えた。正義感が強いがその分思い込みが激しい。一度そうだと断ずればそれを押し通す。それがいくら間違っていようとね。そして、押し通せるほど力があるから面倒でもある。挙句に性善説を信じて疑わない。

最後に騎士（モブＡ）。名前は知らない。興味もない。見るからに熱血漢。ハジメや僕とは絶対に交わらないタイプの人間。正直、近くに居るだけで体感温度が３度以上あがりそうだ。あっち行け。

教室に入ってきた三人の個人評価を下していると何やら茶番が始まった。内容は天之河何某が「香織の料理を寝ぼけながら食べるのは僕が許さないよ」と言い。白崎が「なんで許可がいるの？」とド正論を言う事によってその場が一瞬にして笑点さながらの笑い（失笑含む）になってしまった。特に八重樫、笑いすぎだ。

そんな日常の一風景を見ながら人理の未来を見る。

「あと、１０００年もしないうちにこのまま滅びるか……。それが星にとって星が永続するのに必要だとしても少しは血袋が欲しいものだね」

「フェリド？何か言った？」

「いや、相変わらずあの３人組は愉快だな、とね」

「あ、あはははははは」

苦笑いするハジメからふと足元に視線をやるとそこには幾何学模様、つまり魔法陣が出現していた。

これが星の意思か。星はこれを確認しているのか。等と頭によぎった瞬間。あたりは光で満ち僕の視界を覆った。

それと同時に星からこの世界の人理は滅亡することが決定されたと伝えられ、各星のアルテミット・ワンが地球に集結することが決定された。この星に敬礼。

この出来事は白昼堂々生徒並びにそのクラスの担任教師が一斉に失踪する大事件となった。各情報機関は連日この事件を報道。専門家による検証や警察などの機関による懸命な捜索もあったが誰一人として見つけることが出来なかった。これは、過去最大の集団失踪とされたらしい。

異世界召喚　ステータス

光が収まるとそこは現代の学校の教室ではなく、何処かの神殿のような場所だった。壁には誰かの肖像画が飾ってあり、全体的に豪華な装飾のされている大広間に居た。

それと同時に僕にの頭には星からの指令が下されていた。星曰く「神は本来星に代わり世界を観測する役目を担っていたが。神が職務を放棄。人の定めを歪め星の寿命を縮めている」とのことだった。意味がよく分からない。まぁ、いずれ分かるだろう。

周囲を見れば僕達クラスメイト以外にこの場に最初から居たであろう数十人の人間が居た。服装からして教会関係者だろう。十字架が無いことからキリスト教では無いのだろう。その中でも一際立派な服装をしている人間が集団から一歩前に出て笑顔でこう言った。

「ようこそ、トータスへ勇者様方。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申すもの。以後、よろしくお願いしますぞ」

僕は盛大に吹いてしまった。だが、僕は悪くないと思う。なにせ、イシュタルだ。あの性悪女神イシュタルと同じ名前の爺さんだ。笑わないわけがない。どうにか僕が大笑いするのを我慢し息を整えた後、僕たちはそれなりに大きいテーブルのある大広間に

案内された。ここも例に漏れず煌びやかで教会とは名ばかりに思えてくるのは私だけだろうか。

そして全員が席に着いたところでイシュタル（笑）は話し始めた。

要約すれば。

人間と魔族で現在戦争中。

魔族が魔物を従えて人間ピンチ。

だから助けて勇者えもん。

綺麗に三行で終わった。そして全くもってふざけた話である。勝手に連れてきた挙句に戦争に参加しろと来た。恐らくだが戦争に参加しなかったら場合は投獄とかするのだろう。私的には異端認定して指名手配もあり得ると考えている。この場では戦争に参加する以外の選択肢は無い。

元の世界に帰せと喚くクラスメイトに対して教皇は「自分たちで帰すことはできない。エヒト様が貴方達を召喚したのだから」的なことをのたまい担任が怒る。それに和むクラスメイトの脳みそは正直理解しがたい。

そして、天之河何某の演説でクラスメイト（ハジメと僕は除く）は戦争への参加を決意。正直、人型を殺した事も無い甘ちゃんが戦争に出ればＰＴＳＤにでもかかるだろう。安易な気持ちで戦争に参加した後に残るのは心の傷だろうか。その場合は人格を

無くして血袋にでもしようか。

その後は教皇の魔法により王宮へ向かった。クラスメイトの誰もが浮かれてはしゃいでる中、僕とハジメは二人そろって最後尾をゆったりと歩いて行った。

王宮につけば国王、王妃、王子、王女の自己紹介がありそしてそのあとは政をするにあたって重要役職についている人間の紹介があった。

その後にあった晩餐会は私としては味気なく、獣の血でもいいから飲みたかった。

そして、翌日からはこの世界についての座学が始まった。

その際に配られたのは何の変哲もない銀の板。少しだが神秘を感じるあたりこれは何か仕掛けがあるのだろう。

騎士団長の話によるとこの板はステータスプレートと言い、血を垂らすことでその者の能力値を出すらしい。この世界では身分証の役割も担っており紛失すれば大事になる。

そして僕としてはかなりの問題がある。僕には人間が作った武器は効かない事だ。同じ吸血鬼（この場合は鬼に当たる）を宿している鬼呪装備なら傷つけることが出来るし、僕の持っている剣でも傷をつけることが出来る。しかし、今出すのは少し憚られる。いや、先にやっておく事で後で動揺する事を抑えることが出来るかもしれない。

それならば早速やるとしよう。僕は前髪をかき上げ後ろに下げている髪の一部を黒

いリボンで結んだ。そして服装を制服から私の本来の服装である貴族服に変える。横で驚いて固まっているハジメを放置して僕は腰の剣を抜き、指を切り付け板に垂らす。とりあえずこれまでに尖がった耳を持つ者を見ていないので一応隠しておく。

するとそこには見る見るうちに僕のステータスが浮き上がってきた。

〜〜

フェリド・バートリー　２４０００００００歳　男　レベル：――――

天職：人理の観測者　星の代行人　人理の選定者　召喚士

筋力：――――

体力：――――

耐性：――――

敏捷：――――

魔力：――――

魔耐：――――

技能：――――

〜〜

と表示されたが殆どＥＲＲＯＲと書いてあって何の意味もなしていない。一体何なんだろうかこれは。それに年齢はそれくらいになるのだろうか。ギルガメッシュより

前から世界を観測している僕の感覚は既にぶっ壊れていたと？
何とも言えない表情をしていると。騎士団長が話しかけてきた。
「ステータスは見れたか？それにその服装は一体……？」
あたりを見れば僕をガン見しているクラスメイトの姿があった。若干名僕を見て頬を染めている人物も居る。
僕はそそくさに騎士団長に己のステータスの書かれたプレートを渡す。見せても見せなくてもあまり意味のないものなので特に警戒するつもりもない。
「あぁ、ありがとう。えーっと、ん？年齢が２４０００００００？ステータスの数字も殆ど無い。挙句に複数の天職もある。本当にお前さんは何者だ？」
渡されたステータスプレートを見て余計に訝しげな目で見てくる騎士団長。それに対し僕はさらっと答える。これはこの世界の神への宣戦布告だ。
「では、ご質問通りお答えしましょう。僕は第七位始祖フェリド・バートリー。星の代行者にして人類の選定者。星の永続を望み星の永続に支障をきたす生物を抹殺する星の粛清者。以後、お見知りおきを」
「つまり、この世界に害をなす存在を殺す存在と？」
「えぇ、それは貴方達人間も入ります。星を汚し犯しつくすのならばその前に塵になって頂くだけです」

「では、敵だと?」
「そんなに焦らないで欲しいですねぇ。僕はあくまでも星に害をなす存在を殺すのであって星に害を与えていない存在には手を出しませんよ」
騎士団長はその場では納得した様に装っているものの、誰がどう見ても訝しんでした。僕はそれをスルーしながら魔法陣を出し、そこからある人物を呼んだ。
「久しぶりだね。フェリド君」
「ひっさしぶりだね〜!クローリー君も元気〜?」
「お蔭様でね。それで?私を呼んだのは何故だい?」
「いや〜、僕の護衛について欲しくてね?ほら、私ってば人気者だから?」
「その前に試合でもする?」
「お〜、する?でも待って、少し飲み物飲むから」
クローリー・ユースフォート。元十字軍騎士で現在は貴族第13位の吸血鬼。そして僕の眷属。
そんな彼に僕は待ったをかけ、何処からともなくトマトジュースのパックを取り出し、中身を飲み干す。そして、騎士団長に今から模擬戦をするから離れているように言った後、互いにある程度離れにらみ合う。そして、剣に手をかけ同時にこう言った。
「僕の(私の)血を吸え」

英霊召喚　決別

戦いは圧倒的だった。赤い斬撃がぶつかり合い、地面を砕いて相手に飛びかかる。互いの剣が交差するたびに火花が散り、甲高い音が鳴る。一種の舞の様に動き周囲を魅了しながら戦い続ける。剣だけでは決着は付かず、格闘戦も混ぜ込まれていく。

結局、決着は付かず（本気を出せば僕が勝てるけどその場合はクローリー君の生死をガン無視しているため出来ない）また今度に持ち越された。

翌日、改めてクラスメイトのステータス確認が始まった。僕はと言うとその横で魔方陣を書いていた。まぁ、召喚陣なんだけど。媒体とか無いし、適当に運任せで進めていこう。一応手には銃型の鬼呪装備があるので咄嗟には動けるだろう。僕の近くにはハジメが居る。しかし、ハジメは一度も魔方陣を見ない。何やら「過去の傷が……」と言っていたのできっと中二病の事を言っているのだろう。

それは兎も角、僕としては隠密に優れたアサシンと遠距離攻撃の強いアーチャー、理性は無いけど攻撃力は莫迦高いバーサーカーを呼び出したいと思っている。バーサーカーは御しきれるか不安は残るがそれでもある程度知人も居るだろう。その縁に掛けるしか無い。

そんな諸々の事を考えている間に騎士団長は僕以外のクラスメイトにステータスについて説明し終わっていた。そして、天之河何某のステータスが王道の勇者でステータスも僕を除けば一番高い事が分かって盛り上がっていた。

そしてついに僕の近くに居たハジメの番になり、ハジメは騎士団長に気まずそうにしながらステータスプレートを渡した。騎士団長も先程まで恐らくそれなりのステータスを見てきたのだろう期待の籠った目でハジメのステータスプレートを見たが、見た瞬間その顔にはなんとも言えない顔になり、しきりに目をこすりそしてハジメのステータスプレートを凝視している。それには僕も少し気になり横から覗いてみた。するとそこには全ての能力値が１０と表記され、職業は生産系の錬成師。技能の部分もパッとしない物が並んでいた。そんな状況に一人の男子生徒（名前を憶えていない）

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？鍛冶職でどうやって戦うんだよ？メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「……いや、鍛冶職の１０人に１人は持っている。国のお抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲～。お前、そんなんで戦えるわけ？」

「……さぁ、やってみないと分からないかな」

「じゃあさ、ちょっとステータス見せてみろよ。天職がショボい分ステータスは高いん

だよなぁ～？」
「っ！」
　そう言われ怯んだハジメからその男子生徒はステータスプレートを奪い取り中身を見る。それを横目で見ながら私は魔方陣を書き終わる。
　そして男子生徒に向かってゆったりと歩み寄る。
「ぶっははははっ～、何だコレ！完全に一般人じゃねぇか！」
「ぎゃはははは～、寧ろ平均が１０なんだから、場合によっちゃその辺の子供より弱いかもな～」
「ヒャハハハ～、無理無理！直ぐ死ぬってコイツ！「少し黙ることを憶えようか？」っ！」
「ッ!?」
　弱者を馬鹿にしないといけない病気に罹っている哀れな人間に忠告してあげよう。
「先程から聞いていれば他人を馬鹿にしないと死んじゃう病気なんですかぁ？所詮は初期値、これからどうなるかは分からないんですよぉ？もしかしたら貴方は成長値が低くてハジメは高いかもしれないんですよ？まだレベル１の状態で良く莫迦に出来ますねぇ、えぇ。僕には出来ない芸当ですよ」
「あぁ!?何が言いたいんだよ、バートリー！」
　昨日の話を聞いていたのか。聞いていたとしても莫迦らしいと信じなかったのか。

そんな事は僕にはどうでも良い。
僕に凄んでいる男子生徒に出した白虎丸を向け、引き金に指を掛ける。此方の世界の人間はコレが何か分かっていないのか反応はしないが分かっている地球組は揃って悲鳴を上げる。
「不愉快なんだよ。もう十分、はしゃいだろう？」
「ひっ!?」
そう言って睨むと男子生徒は腰が抜けたのかその場にへたり込んだ。
それを横目で見た後、へたり込んだ際に落としたハジメのステータスプレートを取り、ハジメに返す。
「さぁ、ハジメのステータスプレートだよ。僕はこれからちょっと召喚するから。邪魔しないでね～？」
「え？あ、う、うん」
そんなやり取りの間へたり込んだ男子生徒が此方を睨むように凝視していたが気にせず放置した。一部また頬を赤くしている現地の人間とクラスメイトが居たがコレは無視に限る。
「さて、召喚陣は書き終えた。媒体は無いが……まぁ、僕の剣で良いだろう」
「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。　祖には星の意思。

降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「――――Ａｎｆａｎｇ」

「――――告げる」

「――――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者――。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

その言葉と同時に魔方陣が光り輝き、クラスメイトや現地人から驚きの声が聞こえる。

光は直ぐに収まり、そこには1人の女性が跪いていた。跪いていた女性はゆっくりとした動作で起き上がり、僕を見つめる。

「こんにちわ、いえ、お久しぶりです。サーヴァント、セイバー……あら？あれ？私セイバーでなくて……まぁ！源頼光と申します。大将として未だ到らぬ身ですがどうか、よろしくお願いしますね？ふぇりどさん」

「えぇ、此方こそよろしくお願いしますね頼光さん。僕としても貴方が来てくれればとても心強い！ついでに、後2人ほど召喚したいので退いてくれません？」

「あら？それは申し訳ありませんわぁ。ささっ、続きをどうぞ」

「えぇ、では」

周りが唖然としている内に話は進み2人目に移った。この時、頼光の母性の証の揺れに男子生徒達が前屈みになってしまい、それを女子生徒達がゴミを見るような目で見ていたのは完全に余談である。

「素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。　祖には星の意思。

降り立つ風には壁を。　四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環

せよ」
「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」
「――――Ａｎｆａｎｇ」
「――――告げる」
「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」×２
またもや光が起こり、魔方陣には２人の人影があった。
片方は期待していたとおりだがもう片方に問題があった。
「アサシン。ジャック・ザ・リッパー。よろしく、マスター」

「ヤッホー！相変わらずのんびりとした顔をしているわね！でもホッとした、貴方はそうでなくちゃ。さて、私と同名のクソ爺は何処かしら？今すぐにでも消し飛ばしたいんだけど」

アサシンは本人が言ったとおりジャック・ザ・リッパー。ロンドンの切り裂きジャック。正体は生まれることも出来なかった胎児の霊と生まれても捨てられた子供達の霊の集合体。酸の霧を出したり、記憶を改竄できるなど出来る子である。

もう片方、アーチャーとして顕現したのはなんとイシュタル。先程注ぎ込んだ魔力では神霊は召喚できないはず。にもかかわらず出て来たと言うことはあのイシュタル（同名の爺）にかなりご立腹のようだ。

僕はジャックを抱き上げながらイシュタルに向き直る。

「それは正直困るからやめて欲しいんですけどねぇ。それに、僕の予想ではエミヤ君かトリスタン当たりが来てくれると思っていたんですけど」

「あぁ、それは私が無理矢理間に入ったからよ。流石にアレは自分の手で下さないと気が済まないわ！」

「それで良いんですかねぇ。金星の女神様」

「なによ。文句ある？」

「僕、それ以上暴走するならエレシュキガルも召喚しますよ」

「……大人しくしていてあげるわ。感謝しなさい」
　金星の女神こと、イシュタル。ギルガメッシュに笑っちゃうほど思いっ切り振られた女神。僕の中に居るギルガメッシュは「ブハッ！まさか、遠坂のうっかり娘に憑くとはなぁ……！……これは絶好の肴よなぁ……フハハハハハハハハハハハ!!!!」と、テンション最高潮である。
　僕と僕が召喚したサーヴァントの声だけが広場に響く。僕はジャックに向き直り、あらかじめ考えていたことを話す。
「良いかい？ジャック、無闇に女性を切り裂いちゃ駄目だよ？僕としても、心苦しいからね」
「うーん？頑張るね！」
「出来れば、頑張るじゃ無くて分かったっていって欲しいね」
　そう言っている内にクラスメイト達が動き出した。頼光にガン見する男子達、イシュタルを興味深そうに遠巻きに見る女子生徒。ジャックと戯れる僕を見て和むその他。
　そんな時、僕に近づいてくる人物がいた。天之河何某である。
「ん？どうしたんだい？僕はジャックと親睦を深めるのに忙しいんだけど。あ、ジャック飴いる？」
「いる！」

「フェリド君、君はこんな幼い少女を召喚するなんて酷いことをするんだ！」
僕はそう言われて一瞬何を言っているのか分からなかった。そして暫くしてようやく合点がいった。つまり、彼から見れば僕は危険な世界に幼女を拉致した外道に見えるのだろう。まぁ、何も知らない人間から見ればそうだろう。
「成る程、しかしその文句は見当違いですね。ジャックはかつてロンドンを賑わした切り裂きジャック。英霊である彼女の存在意義は戦いにある。最も、僕としては戦い以外も知って欲しいけどね」
「それでも、間違っている！それに、ジャックちゃん？だったかい？君だって人殺しは嫌だろう？」
「なんでそんな事を聞くの？私達は私達が生き残るために解体するしか無いのに」
純粋無垢とも言える目で言い返され一瞬動きを止める。
しかし、直ぐに動き始めてまたもや無意味な説得を始めた。
「それでも、殺すことは駄目なことだよ。話し合う事で互いに理解できるかもしれないだろう？」
「ふぅん？じゃあ僕からも聞こう。かつては今ほど出生率も高くなく、子を宿すことを女性達は喜んでいた。しかし、喜ばない女性達も少なからず居るわけだ。例えば娼婦とかね。そう言う人間達は何をしたと思う？捨てたのさ、生まれて間もない赤子を。生ま

れるまえの生命をそこら辺のゴミ溜めに排水路に。
　そして君には分かるか？親に捨てられた子供の気持ちが。明日がある事が当たり前な君たちとは違い明日は不透明今日の食事すら危うい孤児達の気持ちが。盗みを殺しを時には体を売って、地べたを這いずり泥水を啜りながら意地汚くも美しく生きていた子供達の気持ちが。君は分からないだろう。
　相手の環境も考慮せずただ頭ごなしに否定することしかしない君には。只生きていたかった。母の温もりが、愛が欲しかった。なんで自分たちは死なないといけないのか。そう思いながら死んでいった子供の無念等分からないだろう。
　純粋無垢故に歪められてしまった根本を存在自体を否定している君には……ね。僕は召喚士だ。過去の英霊や逸話の元にした過去の人物を召喚する召喚士だ。僕と縁を持つ者達を召喚する召喚士だ。つまり、彼女も僕と深く関わりある。そんな彼女への暴言は僕は看過できないね」
「僕はそんなつもりは……！それに、そんなの間違っている！」
　無理だな。僕には理解できない人間風情（家畜）が何を言っているのだろうと思ってしまう。いや、一部は認めよう。僕は博愛主義だ。
「そうですか。でも、コレだけは言わせて貰いますよ。君は何時かその甘ちゃんな思想が原因で死ぬ」

「甘ちゃんじゃ無い！フェリド君、君はやはり間違っている！」

これが、僕と天之川何某の決別を決定付けた出来事だった。

ジャックだが、途中から僕の腕の中で眠っていた。イシュタル暇なのか（暇だろうなぁ）空を縦横無尽に飛んでいた。頼光は僕の後ろでニコニコと微笑んでいた。ただ、頼光の笑みには何故か威圧感を感じたのだが、ジャックはまだ子供だぞ？

嫌な予感　吸血鬼

あの出来事が起きてから僕は座学や訓練には出ていない。宗教国家ましてや今回星から下された粛正対象を崇めている国の学などたかがしれている。欺瞞と偏見で塗り固められている汚らしい歴史だろう。

しかし、元いた世界とは違うんだ。ある程度の地理などは図書館で調べなければなるまい。それにしても、僕とハジメ以外は誰一人としてクラスメイトを見ない。誰もがただ体を鍛える事だけを行っている。それで良いのだろうか？

知恵は時には力を超える武器になる。それが分かっているのだろうか。ハジメは天職が非戦闘系なのでその欠点を補うべくこうやって図書館に通い詰めている。僕も少しばかり知識を貸し、銃などの錬成も行っている。

「それで、ハジメ。僕としてはある程度知識を溜めた後に出て行こうと思う。ハジメもどうだい？」

「……そうだね、僕も足手まといみたいだし。それに、世界を回ってみたい気もするかな」

「そっかぁ！なら、今度の迷宮で折を見て離脱しよう。僕の能力に丁度良いのがある」

そう言いながら今日も図書館で一日を明かした。

騎士団長が言うには次回から迷宮とやらに行くらしい。その迷宮はいまだ誰にも踏破されておらず、今なお攻略中だとか。何年前からやってるのかは知らないが。それにしても遅すぎるだろう。

少し話を戻すが僕やハジメは戦闘職と言うわけでは無い。いや、まぁ、僕はオールラウンダーではあるが。それは置いといて、他の彼らの職業は恐らくその人間の特徴や性格、そしていかに神（笑）が楽しめるかで決められていると思われる。

なんせ僕ら以外にこの世界の情報を集めようとする人間が居ない。それはつまり彼らは天職を授けられた時点で何かしらの思考固定を受けているのではないのだろうか。例えば、この世界の情報を集める気を無くすとか、思考の単純化とか。そうすることによりより愉しく人形劇が出来るわけだ。つくづく莫迦らしく思える。そんな事をするために僕らを呼んだのか……と。

そもそも、相手は神ですら怪しいのだ。本来神は権能を司る存在。自然の理に反する現象すら簡単に行うことの出来る規格外の存在だ。故に転移で魔方陣等という人の階位まで落とし込んだ行為をする必要は無いはずなのだ。故に今回の敵は恐らく亜神。人間が神性を持つことでなる事が出来る亜神だろう。まぁ、亜神とは少しの神性で出来る量産型のようなものだ。そこまで大きな権限も無い。しかし、その亜神以外の神も居

ないとなると本格的にこの星をどうにかしないといけないようだ。
　亜神が創れる天使は良くて権天使にギリギリ足が付く大天使だろう。そんな奴に負ける気など一切無い。僕の中に有る英霊の座で女神と英雄王が『この神は殺す。慈悲は無い（直訳）』を言っている。正直、なんでこんなに息が合っているのだろうと思う。普段は仲悪い癖にさ。
　さて、この世界の神への考察は程々にしよう。騎士団長によるとこの後、先に話した大迷宮の内の一つ。オルクス大迷宮に行くとか。僕もハジメもそれに同行することが決定している。まぁ、働かざる者食うべからずとも言う。異論は無い。まぁ、その際に僕を殺しにかかればこの世界から国が一つ消えることになるけど。
「さぁ、ハジメ。今日は早めに帰りましょう。明日は大迷宮とやらに潜るようですからねぇ……。貴方達人間は体が資本なんでしょう？早めに寝ましょう」
「うん。そうだね、じゃあ、帰ろっか」
　そう言って僕たちは図書館を後にした。
　それにしても面白いことが起こるモノだね。かつて見かけた少女（当時は幼女）やつい最近見かけた気もしないでも無い少女を高校になってから見かけたのだもの。何か面白いことが起こるとは思っていたけどこんな事になるとはね。僕の愉悦が止まらない。亜神は殺すけど、慈悲は無い。

〜〜〜

明日からオルクス大迷宮に向かう。あの前に宿に泊まり、英気を養うらしい。養う英気もないような気がしますけどね。魔人族と言うには人型であり、知能もあるでしょうし、人間と大差ないでしょう。それを「殺しに行こう！」と言った勇者は私と似たり寄ったりの人格破綻者じゃないですかね？

そんな事を考えながら部屋の中でハジメと一緒にボーっと外を眺めている。二人の間に会話は無い。正確には話題がないので静かなだけだが。

そんな時、ドアがノックされた。時間はすでに深夜。起きてる人間なんてハジメくらいだと思っていたんですけどね。戦闘時以外は気配探知をしてないから気付きませんでしたよ。

「南雲君、起きてる？白崎です、ちょっといいかな？」

ボーっとしていた僕たちは同時に顔を見合わせ目を見開いた。こんな深夜に予想外の人物が訪ねてきたからだ。別に僕が誘った訳じゃないから。そんな疑う様な目をしないでくださいよ、ハジメ。

白崎に呼ばれたハジメは座っていたベットから立ち上がりドアに駆け寄り開ける。そこにはネグリジェの白崎が……成程、同性愛者か（迷推理）

「Ｗｈｙ　ｉｓ　ｔｈａｔ？」

「えっ？」
　ハジメが物凄くネイティブに英語で『どうしてだよ』と言っている。まぁ、気持ちは分かるが早く中に入れたほうが良いかもしれない。流石に、白崎の見た目は目立ち過ぎる。
「ハジメ、呆けているのは別に良いんですけど早く中に入れたらどうです？白崎の見た目は目立ちますし、変な噂が立ちますよ？」
「へっ!?うん！そうだね!?白崎さんもどうぞ！」
　ハジメに促され、中に入る白崎。僕がハジメに声をかけるまで気が付かなかったのか僕を見て少しばかり驚いている。
「フェリド君？え、二人とも同じ部屋なの？」
「うん、僕とフェリドは同じ部屋だよ。他の人より落ち着くし」
「ハジメ、最後のは余計ですよ。同性愛者と勘違いされますよ」
「それは穿ち過ぎでしょ」
　そう言って笑うハジメに僕も笑う。ハジメは立ち上がり、パックで出来る紅茶擬きを作り、白崎と僕、自分用に出した。
　しばらく、紅茶擬きを飲んでいるとハジメが白崎に話を聞いた。
「それで、話したい事って何かな。明日の事？」

「うん……明日の迷宮だけど、二人ともには町で待っていてほしいの。教官たちやクラスの皆には私が必ず説得する。だから！お願い！」

そう言って頭を下げる白崎。突然の申し出に困惑しながらも聞いてみる。

「いきなりそう言われても分からないよ？どうしてそういう結論に至ったんだい？」

「それは……」

僕がそう聞くとポツリポツリと話し始めた。なんでも夢で僕とハジメ、八重樫や自分が暗闇に落ちる夢を見たらしい。どんなに足掻いても光のある場所に向かえず闇に飲まれていく。そんな夢だったらしい。そんな夢を見た所為か不安になり八重樫や僕、ハジメに話しているらしい。

「所詮は夢……と、切り捨てたら楽でしょうけど正夢って言うのでしょうかね？予知夢？まぁ、そこはどうでも良いんですよ。しかし、心配ご無用ですよ、もしも落ちても僕が絶対に死なせませんよ。落ちた場所から戻れる保証はしませんけど」

「こうフェリドも言ってるし、僕も精一杯気を付けるから」

「……そう、なら、いいんだけど」

何とも煮え切らない顔をした白崎だったが時間も時間だったために僕が無理やりにでも追い返した。「でも…」と言い募る白崎を抱き上げ、白崎の部屋まで連行した。まぁ、同居人は八重樫だったし白崎を回収したとき「後は任せて」って言っていたから

白崎もきっちり絞られているだろう。僕も部屋に戻り、ハジメが自分のベットで寝ているのを確認した後、寝た。

　そんなこんなでオルクス大迷宮そこで一体何が起こるのか。それは、神ですら分からないだろう。人間は予測不能なのだから。

オルクス大迷宮　悪意の顕現

オルクス大迷宮、それが今回僕達が行くことになっている迷宮の名前だ。

現在でも殆ど解放されておらず、その全貌は謎に包まれている。正直なところ、僕は千里眼さえ使えば知ることは出来る。まぁ、する気は無いけど。だって面倒じゃん（慢心）

「にしても、どうやってこんなモノを作ったんでしょうねぇ……。正直、意味が分かりませんよぉ」

「そんな事言ってもなぁ……。僕もなんとも言えないし、それに良かったの？僕と同じパーティーで」

そう言ってハジメが僕に聞いてくる。確かに僕は規格外な事は自覚している。だから言って態々あのいけ好かない勇者と同じパーティーになるつもりなど無い。

腰にある剣を片手でニギニギしながらそんな事を考える。僕達の後ろには源頼光、ジャック・ザ・リッパー、イシュタルが付いてきている。正直、イシュタルには早々に帰って頂きたい。あの爺はまだ殺せないからそれまではＮｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕだ。

「それにねぇ、僕としてはハジメと一緒に居る方が落ち着くからねぇ」

「そ、そう言って貰えると嬉しいよ」

そう言ってはにかむハジメ。中身が女性だと知っている僕からしたら少しばかりダメージが入る。まぁ、周りからはハジメがホモなんじゃ無いかと疑われているようだけど。

僕達はグループの最後尾をのんびりと歩いている。何故前に出ないのかというと天之川何某の視線が鬱陶しいからである。あの召喚の後から何かに付けて「彼女たちを解放するんだ」と言って聞かないので僕の方から近づかないようにしている。

それにしてもクラスメイトからの視線がウザったらしい。ジロジロと不躾に見てくるのでとても不愉快だ。

「ハジメ、折を見て離脱しよう。正直こんな場所からは一刻も早く立ち去るが吉だ」

「そう、だね。皆には悪いけど僕も居場所なんて無いし」

そう言って苦笑いするハジメを見ながら今後の算段を付ける。何処で離脱するかが肝心だ。それを逃してはならない。

そこでふと視線を感じた。視線を感じた方向を見るとそこには勇者パティーが居た。正確に言えばそこに居る二人。白崎と八重樫だった。恐らく、天之川何某の件で負い目でも感じているのだろう。僕はそこら辺人間の感情の機敏に疎い。この体になったのが原因かもしれないね。

「このまま行けば楽にレベルアップできるね。良かったじゃ無いですかハジメ」

「う〜ん。正直皆に申し訳ないかな。戦っても無いのにこうやってレベルアップするのって」

そんな事を喋りながら進む。するといきなり地響きが起き、天井がパラパラと砂を落とす。崩落の危険性は無いはず何だけどなぁ。何でだろうね。

視線を先頭に向けると騎士団長に頭を叩かれている天之川何某が居た。つまり、こんな狭い中で約束された勝利の剣（エクス・カリバー）を放って逆に窮地というか全滅の危機に瀕したと？成る程、只の莫迦か。

そんな時、最前列でクラス最高の愚者である家畜……………生徒が出しゃばった。その前の会話からなんとなく察することが出来た。どうやら、宝石を使ったトラップに浮かれて飛びついてモノの見事に引っかかった様だ。莫迦としか言えない。

瞬間、足下に魔方陣が出現した。そのまま周囲を光が包み込み、瞬間浮遊感を感じる。どうにか尻餅をつく醜態を晒さず済んだが、どうやら目の前から大量の雑魚。そして一際大きな獣が出て来た。

「――――――――――――！！！！！！！！！！！！」

「五月蝿いなぁ、喚くな獣風情が」

自身の存在を誇示するかのように叫んだ獣に白虎丸を構え、弾丸を撃ち込む。

聞き慣れない銃声、突然現れた魔物。それにより先程までゲームみたいだ何だと言ってはしゃいでいたクラスメイトは皆パニックに陥り訓練したであろう陣形等忘れたのか好き勝手に応戦している。後、先ほど騎士団長が言うには雑魚の名前は「トラウムソルジャー」で、獣は「ベヒモス」と言うらしい。雑魚はともかく小物は名前負けだね。弱すぎる。

飛び交う怒号、悲鳴。阿鼻叫喚、生ける地獄とは正にこの事か。

「さて、不届き者の獣を殺すとしましょう。ハジメ、手伝ってくださいね」

「僕が？ま、まぁ、頼まれたらにはやるけど」

そう言ってハジメは僕の横に立つ。サーヴァントである彼女たちは出て来た雑多な魔物の処理を任してある。適材適所、正にその通りである。

ハジメにはこの大きめの魔物の足止めを頼む。味方の連携がままならない今、僕達で対処するしか無い。そんな中、僕らと同じ様に戦って居る人物を見つけた。遠目で見れば白崎と八重樫だった。あの二人は誰よりも早く復活し、対応している。天之川何某とは雲泥の差とも言えよう。

「白崎、八重樫！今は協力して下さいよ！僕がさっさとあの獣倒しますんで！」

「分かったわ！時間は稼ぐ！」

白崎は相手への対処で此方へ反応できそうにない。まぁ、仕方が無いか。阿頼耶識や

ガイヤのリソースを大幅に削いで作られた僕には理解できそうにないけど。なんせ戦闘時は精神を強制的に沈められているからね、戦闘時は慌てることはない。

日常ではある程度の精神制御は成されないけどそこまでテンションは上がらないんだよね。そこが辛いところ。今は関係ないことだから考えるのは止そう。まずは目の前の獣を仕留めないと。

片手で構えた白虎丸を構え、射撃。両手撃ちより精度は落ちるものの吸血鬼としての身体能力故に手ブレは無いに等しい。放った弾丸は迫ってきた獣の足を貫き崖と崖との間に出来た橋の上で獣を倒れさせる。

「僕の血を吸え」

腰に携帯している剣に血を吸わせる。それにより身体能力等が軒並み上がる。元が高いのにそれが余計に上がるのだ。強い（小並感）

白虎丸攻撃で怯んだ所に続けざまに切りつける。見た目こそ硬そうな皮膚はまるでバターを切るかのように滑らかに着られる。その結果に笑みを浮かべていると背後で悲鳴が聞こえた。

振り返ると生徒の一人が雑魚に殺されそうになっていた。普段ならそのまま見捨てるがこの最悪な状態で犠牲者が出ればただでさえ面倒な状況になってしまう。僕はそう思い、左手に持ち替えていた白虎丸を構え、雑魚に向かって撃った。放たれた弾丸は

逸れることなくまるで吸い込まれるかのように雑魚に当たった。崩れ落ちる雑魚。唖然とする生徒。僕はペタンと座ったままの生徒に向かって叫んだ。

「いつまでそこに座っているんですか!?死ぬ気ですか!早く動きなさい!」

その言葉が聞こえたようで生徒は急いで立ち上がり、クラスの集団に向かって駆けて行った。それを見た後、もう一度獣に振り替える。

周囲を観察すれば騎士団長の指示だろうか、魔法を獣に集中放火させている。時々此方にも飛んでくる。油断できない。

「ほいっと!」

そんな事を考えている内に獣も起き上がり、僕に上段からの叩き付けをしようとしてくる。あまり大きく動きたくないのでスレスレで避ける。正直、此所で大立ち回りしようにも橋は脆そうなのでそこまで踏ん張れないんだよね。

一度下がってハジメと合流しようとしたとき、騎士団長の声が聞こえた。

「全員下がれ!このままだと橋が落ちる!早く!魔法が撃てる者達は彼らが撤退する隙を作るぞ!」

そう聞こえた。確かに先程から橋がぐらついている気はしていたがいくら何でも早すぎる。そもそも、そんなに耐久力が低ければ僕達が来る前にモンスターによって破壊されているはずだ。

そう思い橋を走りながら確認する。その瞬間目の前を走っていた八重樫と白崎に炎の弾が着弾し吹き飛ばされた。

「チッ！」

落ちる寸前でどうにか二人の手を掴む。が、又そこに炎の弾が今度は僕の体に当たった。背中が熱い。服が少し焦げたかもしれない。それと同時に僕達の足下の橋が完全に崩れ落ちる。僕としてはこう自然な形で国を抜けれることは好都合なんだけどね、ハジメはどうなってるか分からないけど僕はハジメ以外にも二人ほど命を預からないといけないらしい。

だけど、これだけは人間共に言っておこう。

「憶えていなさい！人間！僕が戻ってきたとき、相応の報復をさせて貰いますよ！」

「フェリド！」

谷底に落ちながら見たのは僕を追いかけるように落ちてきたハジメの姿だった。

全く、何をやってるんですか。貴女は。

迷宮の地下　悪意の代償

八重樫と白崎を両手に抱え、崖の斜面から離れる。斜面は部分的にとがっている場所があり

僕が大丈夫でも人間であるこの二人が大丈夫な保証は何処にも無いんですよね。ハジメは崖から上に吹き上げる風によって何処か別の場所に飛んでいってしまいましたし、ジャックや頼光、イシュタルも僕の後を追って今此方に降りている状況ですしね。今はどうやって着地するかを考えましょう。

まぁ、自由落下に変わりないんですけどね。

その後数分もしない内に地面には着地できた。しかし、此所が何処なのかが把握できず、暫く此所で立ち止まるハメになった。

それよりも大きい原因もある。僕が小脇に抱えていた二人のこと。どうやらこの二人先程の火球による全身とまではいかないものの結構な範囲に火傷を負っている。腹部から上半身、首元まで火傷を負い左腕のない八重樫と胸部から顔の半分に火傷を負った白崎、どちらも重症だ。

「人間は弱い。だからこそ、慈しむべきなのは分かりますけど。うーん、そんな事より応

急処置をしないといけませんね」

即席で僕の服を破き包帯代わりにする。服に関しては後でどうにでもなる。一度星からのバックアップが無くなったためだ。その復旧が完了すれば服なんて元通りだ。

ついでに、火傷を負った人間の服を無闇に脱がしてはならない。火傷の負い具合にもよるが、酷いと服と服と癒着する。もしも、近くに水源があるのなら服の上から水を掛け急いで救急車を呼ぶべきだろう。最も、この世界のましてや迷宮の奈落の底に救急車が来るとは思わないが。

「さてと、応急処置もこれで良いでしょう。一生残りそうな傷ですけど命には代えられませんし、起きた時には割り切って貰うとしか言えませんしねぇ」

二人をもう一度小脇に抱え、移動を開始する。吸血鬼の始祖である僕は無傷だけど人間である二人は無事では無かった。だったらハジメはどうなるだろうか。ハジメは二人より圧倒的にステータスが低い、その上こんな垂直落下で緩衝剤もない奈落に落ちたのだ。生きていたとしても重症に違いない。

それか、既に魔物に……。

「いえ、此所で悪い方向に考えてはいけませんね。出来るだけ、数を増やして生存率を上げないといけませんから。生きていると嬉しいんですが」

闇雲に動いても見つかるわけでも無い。それに此方には重症が二人、この二人がどう

にか回復させた後に捜索した方が良いだろう。僕は良いとして、この二人には二人一組（ツーマンセル）で別行動させる事も視野に入れてありますし。

「何処か簡易的な拠点を作ってそこで二人の回復を待つのも手かもしてませんね」

思い立ったが吉日とも言う。僕は早速二人を一度地面に寝かせ、壁に向き直る。腰に差してある剣を抜き、血を吸わせ振りかぶる。

剣にを吸わせることで跳ね上がった身体能力で起こした鎌鼬。それによって切り裂かれた壁はひび割れ、一日取り分ほどのスペースが出来た。最も、その一人も立っていること前提だが。

「うーん。以外に難しいですねぇ。もう少し頑張ってみましょうか、ねっ！」

壁を削りながら思う。ハジメの天職は錬成師、もしかして一緒に居たらこんな事せずに済んだんじゃ無いか……と。

迷宮の地下　現状確認

正直、白崎と八重樫の傷は余りにも酷かった。こちらの世界に来てエラーでも起こったかのように僕の能力も余り使えない状態でこんな重傷を負われることになるとは全くもって予想外だ。白崎は左半身と顔の左を覆うように出来てしまった火傷。近くにあった水源でどうにか火傷の応急処置は済ませているが痕が残るのは確定だろう。早く僕の能力が十全に使えるようになればもしかしたら……としか言えない。八重樫は全体的に擦り傷が目立つが問題は左腕の肘から先が無い事だ。火球が当たった際に千切れ飛んだのかもしれない。僕の探せる範囲に左腕の肘から先は無かった。傷口は焼き止血しているが、応急処置でしかない。

「はぁ、これは僕の不注意と言った方が良いんでしょうねぇ」

眠り続ける八重樫と白崎を見ながらため息を付く。僕は問題ないけど一応人間である彼女たちは食べ物を食べないと死んでしまう。そもそも、怪我を負い弱っているのだから死ぬのもすぐだろう。いざとなれば僕の血を飲ませる。人間ではなくなるけど死ぬよりはマシでしょう。

「さて、探索しましょうかねぇ。バーサーカーは此処の防衛をアサシンとアーチャーは

僕と一緒に来てください。いや……二人もバーサーカーと共に彼女たちを守ってください。

余りにも協調性のない、ある意味これまでワンマンプレーでどうにかなってしまったが故の結果とでも言った方が良いんだろうか。僕自身もそこまで他者を守っての行動は得意じゃない。片手で抱えられるのなら別ですけどね。

「はぁ、しかし君達に頼むよりかは僕自身が動いたほうが良いですからねぇ。二人の容体が急変したら教えてくださいね。僕が急いで戻ってきますんで」

「「はーい」」

素直な返事はよろしい。僕も素直な人は大好きです。さて、僕を追う様に落ちてきたハジメとは離れ離れになってしまっていますし、できれば早めに合流しておきたいものですね。

「それにしてもコレ、登れるんですかねぇ。もしかして引き返し不可の高難度ダンジョンだったりしません？」

僕一人や僕と英霊だけなら問題ないと思いますけど、今は最高で三人最低で二人は生きて返さなくちゃいけませんからね。そうなるとかなり厳しいですね、食糧問題が特に。

「悠長なことを言っている暇もありませんね。早くハジメを探さないと」

すぐさま目線を下げ、前を見据える。洞窟の中だが何故か明るい。これがご都合主義って言うんですね。知ってますよ。いや、嘘です。ただ単に僕の目が良いだけです。はい。

「にしても、闇雲に探しても意味ないですし、どうしましょうかね」

しばらく考えて、今使える自分の能力をピックアップしていく。僕は神代より前から生きていて永遠に星を観測する者。それが当時の英雄に殺されない様に様々な能力が与えられている。例えば不死だね。吸血鬼の体だから半不死状態だけど死ぬときは死ぬ。これに関してはアーサー王のアヴァロンで解決した。

そして攻撃用の物はある意味規格外なモノを用意された。時代が進めば進むほど強くなっていく宝具。名前は伏せさせてもらうよ、今はその時じゃない。

だが、一旦は見せよう。

「ワルキューレ、０１から０５までこの階層の探索！敵性生命体を発見した場合は出来るだけ速やかに排除、僕が探している南雲ハジメを見つけた場合は即座に僕に報告！」

「はっ」

最初からそこにいたかのように存在したワルキューレに命令を下し、僕自身もハジメを探し始める。僕が奈落に落ちてからそこまで時間は経っていない。二人の応急処置をしていた時間を含めてもまだ5時間ほどしか経っていないと思う。

たかが5時間、されど5時間だ。5時間あれば人間は簡単に死ぬ。僕はそれを知っている。だからこそ、急がないといけない。先ほどまでのが表層、いわゆる浅層だとすれば此処は深層。どんな敵が居るか分からない。もしかすればあのデカブツを超える化け物が出るかもしれない。のんびりとする事は許されない。事態は刻一刻を争う。

僕は腰の鞘から剣を抜き、駆け足で洞窟の中を駆けた。

迷宮の地下　再会

フェリドは洞窟の中を歩く。自然に出来たには地面はある程度平たく、嫌にも人工的に作られたと思わせる。

白虎丸の引き金に手をかけ、いつでも撃てるようにしながらハジメを探す。フェリドが落ちた場所からハジメが落ちた場所はそこまで離れているとはフェリドは思っていなかった。ハジメはフェリドを追う様に落ちてきた。途中で何かに当たり、離れていてもそこまで遠くに行っていないだろうとフェリドはあたりをつけていた。しかし…

「なんでワルキューレからの連絡も無いんですかねぇ。さっきから小動物の魔物はよく見ますけど、一向にハジメが見当たりませんよ。もしかして、地面とか壁とかに埋まってたりしませんかね。ほら、ゲームのバグみたいに……って何独り言言ってるんですかねぇ？」

そう言って肩を落とすフェリド。その背には少しばかり哀愁が漂っていた。しかし、このままではいけないので気を取り直してハジメ捜索に戻る。

最も、これまでと同じようにただ人間の血の匂いを探して歩き続けるだけだが。

そうして歩いていること数分、目の前に仁王立ちする熊の背が見えた。フェリドは不

思議に思い、少し横にずれて熊の先に何があるのかを確認すると、そこには傷だらけのハジメが横たわっていた。
　ハジメは腹部から血を流し気を失っているのか一向に動こうとしない。
「ッ！ハジメッ！」
　フェリドは焦り、熊の頭部へと白虎丸の標準を合わせ撃つ！白虎丸から放たれた銃弾吸い込まれるように熊の頭部へと向かい……頭部を貫通し、粉砕した。
　これまで迷宮で戦っていた相手はすべて剣で戦っていたためこの展開を全く予想していなかったフェリドは一瞬その場で呆然としたが、ハジメのけがの具合を思い出し急いでハジメに駆け寄った。
「ハジメ？ハジメ！しっかりしてください！生きてますか!?」
　ゆすってもうんともすんとも言わないハジメにフェリドは意を決して（女子の顔を叩くことに対して）平手打ちをした。
　洞窟内にバチーンと痛そうな音が響く。
「ふぇ!?へ!?フェリド？生きてたの！って言うか、頬が痛い！」
「あ、すみません。僕が頬を叩きました。起きないんで、目覚め代わりにしましたよ」
「どれだけ思いっきり叩いたのさ！もの凄く痛いんだけど！」

起きたのはいいが突然頬に走る痛みに対し涙目になり、その行為を行ったのがフェリドだと知り抗議するものらりくらりと躱され、あれよこれよという間に八重樫や白崎が寝ている仮拠点の場所まで案内された。

「フェリドはケガしてないの？」

「ほら、僕は星の特別製ですから頑丈ですし、不死身ですよ。それより、ハジメこそケガはそれだけですか？他にもあったりしません？」

ハジメにケガの有無を心配されるも、冗談めかして自身の無事を証明するフェリド。そのまま流れるようにフェリドはハジメの血の滲んだ腹部を見ながら心配そうにハジメに尋ねる。

「ハジメや八重樫、白崎には特に気を付けてくださいよ。人間は脆く壊れやすいんですから」

「人をガラス人形みたいに言わないでくれるかな……」

そう言って肩を落とすハジメに笑うフェリド。フェリドとハジメはそのままここまでの互いの情報交換を行いながらフェリドが仮拠点としている無理やり掘った穴に向かう。

途中でフェリドが招集をかけたワルキューレたちを見てテンションが上がっていたのは余談だ。

「ほら、ハジメ。ここが僕達の仮拠点ですよ」
「仮拠点って……凄い大きい穴だね」
　ハジメのその一言にフェリドは「それなりに力入れて削りましたからねぇ。そうなりますよ」とお気楽に言っていたが、迷宮の壁がそんな簡単に削れるわけがない。フェリドがおかしいだけである。
「とりあえず、お腹の傷を見せてください。さっきは応急処置でしたから今ならもう少しまともな処置ができますから」
　そう言ってハジメの腹部を指さすフェリド。それに対し、ハジメは頬を染めながら腹部を晒す。そこには三本の傷に沿ってジワリと血の滲んだ布が押し付けられていた。ちなみに、押し付けられている布はハジメの着ていた服の腕部分である。フェリドは自分の服でも良かったのだがハジメからの強い要望によりハジメの服を使っての応急処置となった。
「それにしてもこれだけの傷でよく済みましたね。どこに落ちたんですか？他に大きな傷はありませんし」
「水溜まりに落ちたんだよ。お陰で死なずに済んだんだ。まぁ、衝撃で気絶しちゃったけど」
　そう言って苦笑いするハジメに少し顔をしかめるフェリド。水に落ちた角度が悪け

れば最悪死ぬ、はたまた骨の何処かに罅を入れている可能性だってある。その可能性を察してフェリドは顔をしかめたのだ。

しかし、何時までも顔をしかめていてはハジメを不安にさせるだけ。フェリドは笑顔を作り、ハジメに聞いた。

「そう言えばハジメ、此処までに何か食べれるものありました？僕は別にいいとして他のハジメを含む三人は食べ物が必要でしょう？」

「あー、確かにね。でも、フェリドに会うまで僕は食べ物らしきものは何も見てないよ？そもそも、服を乾かしていざフェリドを探しに行こうって時に熊に襲われたしね」

そう言って肩を竦めるハジメにフェリドは「そうですか」と言ってこれからも食糧事情について考える。地球からこちらに来るにあたってフェリドの能力は一度色々とエラーを起こしていた。今もそのエラーの修正に大半を割いているため、英霊召喚のみ使用可能となっている。

その状態ではやれることは限られている。精々自分専用の宝具を使うのが関の山だ。ちなみに、これに食糧を解決する手立てはない。

「そうなると、本当にどうしようもありませんねぇ。いっそ、そこらへんに居る魔物の肉でも食べます？」

「それが良いかもね。でも、確か本で魔物の肉には猛毒が含まれているって書いてあっ

たよ？」
「うーん、それを回避する手立てがあれば良いんですけどねぇ。回復魔法だと一人だけ無理ですし、いや、もしかしたら出来るかもしれませんけど」
　そう言いながら白崎を見るフェリド。結局その日はハジメが落ちたという水たまりから水を持ってきてそれで飢えをしのぐことになった。白崎も八重樫も未だ目覚めないまま。

迷宮の地下　目覚め　上

ハジメと再会して一日が経過した。フェリドの簡単な治癒魔術により白崎と八重樫の傷は回復傾向にある。目覚めるのもそう遠くないかも知れない。

そんな中、フェリドとハジメは装備を整えていた。と言っても、フェリドは焦げた服を脱ぎ捨て能力で新調し、ハジメは寝たときに乱れた服を整えただけだ。ハジメの剣は奈落に落ちてきたときに何処かへ行ってしまった。詰まり丸腰である。

「さて、昨日に引き続き皆には彼女たちを守ってくださいね。ちょっと食料になるかもしれない魔物を獲ってくるので」

「分かりました、ふぇりどさん。しかし、少しは出番を下さいね？でないと来た意味がありませんから」

「そうですね、以外と直ぐだったりするかもしれませんよ？」

そうバーサーカー源頼光と話すフェリド。それを暇そうに見つめるハジメ。若干ハジメの目が濁っているのは気のせいだと思いたい。

ある程度話して満足したのかフェリドはハジメに振り返った。

「さて、ハジメ行きますよ。獣狩りです」

「そう言えるのはこの中でフェリドとその仲間の英霊の人達だけだよ。……僕は弱いから守ってね？」

そう言ってフェリドに上目遣いをするハジメにフェリドは「お安いご用ですよ」と言って

頭を撫でた。そこだけ少しばかり空気がほんわかしているが此所は迷宮、本来死と隣り合わせの場所だ。こんな雰囲気になるのはフェリドが悪い。

「さて、まずは狼から仕留めるとしましょう」

「狼？他にも小動物系の魔物が居なかった？」

フェリドの呟きにハジメは首を傾げた。フェリドとハジメはこの仮拠点まで着く間に何度か魔物と遭遇しておりその際兎の魔物を見たからである。兎の魔物を見て「他にも小動物系の魔物は居るだろうから。何も食料として狼を食べるのはどうだろう？」と思ったからである。

フェリドはハジメのそんな疑問に柔やかに答えた。

「だって一度で多くの肉が獲れるでしょう？他の魔物は群れませんけど狼に関しては群れで動きますから」

「いや、でも、狼だよ？」

それでも尚言いつのろうとするハジメの口にフェリドは人差し指を当てた。そして

空いている手で先の方を指さした。どうやら多め当ての獲物が来たようだった。
「グルルルゥゥゥ」
「あれま、気が付かれたみたいですね。まぁ、直線上に隠れずに居るから仕方が無いんですけどねぇ」
「いや、速く倒さないと！僕、武器無いよ!?壁作るくらいしか出来ないよ!?」
そう言いながら「錬成！」と叫び、地面から壁をフェリドと自分の作り出し、防壁代わりにする。そのハジメの行動と共にフェリドは腰から何時も身につけている洋剣ではなく、刃の部分が緑色と異色な刀を抜いた。
「さて、狩りと行きますか。ハジメ、そこで見ていてくださいね？」
フェリドはそう言うと防壁から飛び出し、狼の群れに踊りかかった。フェリドの速度は狼の認識外だったのか、狼はフェリドの接近に全く反応できず先頭に居た狼の首を狩った。流石に先頭の狼がやられれば他の狼も反応しフェリドに向かって赤い稲妻を放った。フェリドはその攻撃を横に避けそのまま勢いを殺さず狼の群れの真ん中に突撃、中央で横凪ぎに狼をなぎ払った。その攻撃に狼は全滅。フェリドの勝利となった。
倒した狼の首を落としそのままその場で血抜き終わればハジメと引き摺りながら仮拠点に運び込む。運び込む途中に兎の魔物が襲ってきたのをフェリドが遊撃その際の衝撃でまた吹き飛んだ壁に鉱石が埋っており、ハジメ曰く「神結晶」と言うらしく、そ

こから滴る雫はあらゆる怪我や病を治す万能薬らしい。試しにハジメの傷口にかけると少しばかり薄く跡が残ったが傷口はあっという間に塞がった。それを見て使えそうだとフェリドが腕力に任せてもぎ取ったと記しておく。

　そのまま狼を引き摺りハジメは神結晶を抱いて仮拠点に戻ってきた。

「いやー、大量でしたね。食べれるかは別として」

「そうだね。神結晶もゲットできたしね」

　そう言いながらハジメは手に持っている神結晶を掲げた。そのハジメの表情は少し誇らしそうだ。その後は白崎と八重樫の汗を拭きハジメが作った錬成陣で生まれた火球で肉を炙っていた。最初はフェリドが用意しよう通したがハジメが「少しは僕がやるよ！」と言って聞かず、フェリドが折れる形となった。そしてやる事の無いフェリドはサーヴァントたちと喋りながら白崎と八重樫に神結晶から地道に溜まるのを待って溜めた神水を振りかけていた。

　神水を振り返ると八重樫と白崎はみるみる怪我が消えていった。少しばかり痕が薄く残っているがそれも時間が経過すれば問題ないだろう。

「「ん……」」

「おや、この神水は効果覿面ですね。八重樫、白崎、僕が分かりますか？」

　呻き声を上げて顔を歪める二人にそう言ってフェリドは二人の顔を覗く。薄く目を

見開いた二人をバーサーカーと一緒に起き上がらせる。
「大丈夫ですか？丸一日寝たきりでしたし、寝ていた場所が岩と言うか地面ですし」
「ちょっと節々が痛いけどそれ以外は問題ないよっ。それと、此処は何処？」
「あ、それはハジメに聞いてください。僕は八重樫のケアに入りますんで」
そう言ってフェリドは後ろで錬成した石の棒にフェリドがカットしたオオカミの肉を指して焼いているハジメを指した。フェリドは白崎に「立てますか？」と聞くと白崎は「大丈夫だよ」と言ってゆっくりとだが立ち上がって見せた。それを見て目元を綻ばせたフェリドは八重樫に目を向けた。

迷宮の地下　目覚め　下

目覚めた八重樫に近づくフェリド。未だ宙を見る八重樫の傍らに座る。
「八重樫、僕のこと分かりますか？」
「……バートリー君？」
焦点の合っていない八重樫の目には自分の状態から目を逸らしているようだった。それを痛ましく思いながらフェリドは現実を告げる。
「非常に言いにくいけど僕が助けたときには既に左腕が無かった。それに、あったとしても既に魔物に食べられてると思う……」
「そ、そんな……嘘……よね？バートリー君の冗談なのよね？」
「流石に僕も前ならいざ知らず今はそんな冗談を言いませんよ」
フェリドの言葉に八重樫は頭を抱えたそしてその時左腕が肘から先が無い事を嫌でも思い知らされ、八重樫は「あ……あぁ……」と目が虚ろになっていった。
その不味い兆候にフェリドは抱き寄せ、背中を撫でながら落ち着かせようとした。出来る事なら麻酔や睡眠剤で一度眠らせ、落ち着かせる方が良いのだが迷宮にそんなものは無い。それに、眠らせれば非戦闘者を一人連れて歩くことになる。それは、この迷宮

では死を意味するだろう。
「落ち着いて、落ち着いてください。大丈夫、僕が守りますから。ほら、深呼吸して」
「はぁ、はぁ……ふぅ。ごめんなさい。取り乱したわ、ごめんなさい」
フェリドに縋る様に体を預ける八重樫は弱弱しく、それでも安心させるように笑顔を作ったが余りにもぎこちなさ過ぎてフェリドはそのまま暫く八重樫を抱き寄せてあやしていた。因みに、あやし方が子供や赤子に行うそれだったのはご愛嬌と言うか、なんと言うか、絵ずらがアレであったりした。
暫くして落ち着きを取り戻した八重樫は顔を朱に染めて立ち上がった。しかし、五体満足の時とは違い片腕がない状態。普段と違う感覚によろけ倒れそうになるのをフェリドの介護を受けながらどうにか立ち、白崎とハジメがいる場所に向かった。
「ハジメ、お肉の焼き加減はどうですか?」
「うーん、見た目は大丈夫かな?あと魔物のの肉は猛毒らしいから神結晶からとれた神水も用意してやっと完成だと思うよ」
フェリドの問いにそう言いながら一心に魔物の肉を焼いていくハジメ。その姿はまるで焼き鳥を焼くアルバイト店員のようだった。
そんなハジメに何と言ったらいいのか分からないフェリドは暫く無言でハジメの肉焼き作業を見ていたが誰から鳴ったか分からない。お腹の音に顔を見合わせることに

なった。
　そして、音の発生原因はすぐに分かった。ハジメだったのだ。こちらをスルーしているが分り易いほどの頬を染めている。お腹を鳴らしたのが恥ずかしかったのだろう。
「お、お肉も焼けたし、神水もあるから皆食べようよ！えぇっと、フェリドは要らないんだっけ？」
「えぇ、僕は本来食事を必要としない種族ですから。それに、食事代わりの専用のモノもありますしね」
　そう言ってフェリドは片手をヒラヒラとさせていた。フェリドの言った「モノ」が気になった三人だが、今は喋ってくれないだろうと思ったのか、それ以上言及しなかった。そして、それぞれ、喉をゴクリと鳴らして目の前にある魔物の肉に齧り付いた。
「うえぇぅ、マズッ！」
「で、でも、食べないと」
「そ、そうね……」
　三人とも余りの不味さに顔をしかめたが、これ以外食糧がない以上これを我慢して食べるしかないと割り切り無理やり飲み込み胃の中に納める。そして、次の瞬間三人に変化がお訪れた。
「あ〝ぁ……ウグゥゥゥウ……!?!?」

「イッ!?ウグッ……あ〝ぁ〝ぁ〝あ〝!?!?」
「あぐっ、うぅ……!くぅぅぁぁアアアア‼?!?!?」
「ちょ、ちょっとこの急展開は僕も予想してませんよ!?大丈夫ですか?皆さん!?」
フェリドは慌てて三人に駆け寄る。三人は吐き出しそうになるがどうにかに見込み神水を煽った。フェリドはわちゃわちゃする事しか出来ず。せめてもと三人用に岩を削ってイッ〇Qの虹が出るときの場所を作っていた。
暫くすると落ち着いたのか三人は黙っていた。フェリドはせっせと三人分の穴を掘っていたので全く気が付いていなかった。が、三人が黙ったことに気が付いたのかひょっこりと頭を出し、様子を窺った。
そしてそこには白髪に赤眼の三人の少女が居た。
「え、ハジメと八重樫と白崎ですよね?どうしました?余りの不味さに頭が逝ってイメチェンですか?似合いませんよ?」
「「イメチェンじゃないから!」」
フェリドのコメントに仲良く同時に抗議する三人。それを見たフェリドは「仲いが良いですねぇ」等と言いながら三人の髪と目以外の変化に気が付いた。
「あー、セクハラになるかもしれませんけど確認のために言いますよ?他意はありませんからね?ハジメ達、胸大きくなりました?」

「何言ってるの、バートリー君。ハジメ君は男……の……子？」
「どうしたのかお……り？」
フェリドの言葉に笑いながらハジメを見た白崎と八重樫はハジメを見たまま硬直した。それはハジメがとても女らしい体系になっていたからだ。そして、ここで白崎と八重樫の二人がハジメが女だった事を知らなかった事をフェリドは思い出したが今更である。
そして、その後フェリドとハジメは混乱する八重樫と中途半端にあるオタク知識から訳の分からない事を言い始める白崎に事情を説明するのだった。

閑話　クラスメイトから見た吸血鬼　同級生Ａ視点

フェリド・バートリー。ドイツからの留学生で、その容姿と性格からかなりの人気を取っている生徒だ。俺か？俺は何の変哲もない同級生Ａとでも思ってくれ。

バートリーがこの高校に来たのは入学式から少したってからだった。クラス担任から転入生が来ると言われて入ってきたのがバートリーだった。段々暖かくなっているというのに長袖を着て片手に日傘を持っていたのが印象的だったから今も覚えている。後から知ったんだがバートリーはアルビノと言うヤツらしく日光に当たるのが極力だめらしい。だから日傘持っていたのか。いや、一年も経ってないのに昔の様に言うのはおかしいか。

とにかく、バートリーは何をするにも制限がかけられているらしく唯一制限のない食事を何よりも楽しみにしていた。俺がよく見かけたのは学校の机一杯に置かれた甘味のデザート類を幸せそうに食べているバートリーだけだが、すごく幸せそうだった。対照的に、それを羨ましそうに見ながらお腹周りを気にする女子も居たが、俺は見なかったことにした。女子は敵に回すとすごく怖いぞ。うん。

アルビノで日光に弱く、それ以外でも体の弱いフェリドは何処か儚い印象を持ち、『深

淵の王子』の様だとクラスの女子が言っていた。それに、ドイツ人と言う整った顔やスラリとした体。それでいて社交性も高い。人気になるのは必然だったのかもしれない。今の転入して二週間ほどたった時には二大王子様と言われるほどまでの人気を獲得していた。何時しか女子生徒の間で『バートリー君親衛隊』なんてものが出来ていた時はさすがに変な声が出たが完全に余談だな。

まぁ、そんな王子様にはやっぱり麗しのお姫様が必要なわけですよ。それがなんと最初から王子様と呼ばれていた。天之河光輝とよく居るのを目撃されていた白崎香織姫だった。……我ながら最後に姫ってやるの気持ち悪いな。もうやらね。そんな白崎さん（さん付けが一番しっくりくる）だった訳だけど、そこからはそれこそ物語でありがちの一人の女性を巡って争う二人の美男子の図が出来上がっていたんだけど、アレは恐らく天之河が一方的に突っかかってバートリーが流してたんだろうな。

確かに、バートリーは自分が体が弱い事を大っぴらに言っている訳じゃないから体育の時間着替えもせずに見ているのを見てサボっていると思っている生徒もそれなりに居るらしいし、筆頭は天之河らしいけど。

それと、バートリーは日本のサブカル……簡単に言えばオタク文化なんだがそれに興味を示したのか自他認めるオタクの南雲ハジメとよく居るのを見かけるんだよな。その所為か一部の腐女子から南雲×バートリーのＣＰが出来上がっているらしい。

親衛隊の女子が騒いでた気がする。魔女裁判か何かか？

そして事件当日。いつも通りの二大王子（片方未公認）の白崎さんを争う（一方的）な論戦（ですらないもの）が始まったかと思ったとき、いきなり足元に魔方陣が浮き上がり俺達は異世界に拉致、召喚された。ただ、この時バートリーだけが冷静に魔方陣を見ていたのが印象的だった。

異世界に召喚され、元の世界に帰れないと言われ皆が混乱している中バートリーと南雲は黙っていた。これもまた印象的だったね。あ、後アレだ。メイドさんから飲み物を受け取るときのバートリーの動きがまんま王子様って言うか貴族っぽくって女子の一部が頬を染めてた。さては親衛隊だなオメーら。

そして、ステータスみたいなのが分かる日が来た。因みに俺は剣闘士だった。聞いてない？そっか、泣いてないぞ。目から食塩水が出てるだけだ。

この時、バートリーがすごく強い事が分かった。後、長生き。メルド団長の話だとステータスプレートは偽造は出来ない（出来るかもしれないが今はそんな事が出来る人間が居ない）らしく、恐らく年齢はあっているらしい。２４億歳のクラスメイトってパワーワード過ぎない？その時のバートリーの貴族服にクラスの親衛隊の女子が興奮していた。まぁ、その後の南雲を庇い檜山達を威嚇した姿に腐女子も興奮してたけど。

そして、クラス内でのバートリーに対する扱いを決めかねていた際にそれは起きた。

『憶えていなさい！人間！僕が戻ってきたとき、それ相応の報復をさせて貰いますよ！』

『フェリド！』

バートリーは誰かが放った火球に当たった白崎さんと八重樫さんを助けようとして同じ様に火球を受けて奈落へ落ちた。そして、その後を追う様に南雲も落ちていった。

白崎さんと八重樫さんが落ちたことにショックを受けた天之河もメルドさんのお陰で本調子とは言えないけど持ち直し、どうにか命からがら脱出は出来た。

今回の事件で前線に出ようとする奴は減るだろう。また、バートリーを慕っている親衛隊による犯人探しなどクラス内の不和も大きくなりそうだ。天之河もそれを知ってか知らずか放置だし。頼む、バートリー。生きていてくれ。そしたら、確実に親衛隊だけは暴走が収まるから。

閑話　とある年のクリスマス

ある雪が降る１２月２５日の夜。白く雪化粧を薄く纏った公園にあるブランコに一人の幼女……少女が一人寂しく座っていた。まだ小学生かその前の幼稚園の年長組程の幼さを持つ少女の顔はとても暗かった。空も暗くなっているから分り辛いが目元が少し赤い。

あたりは既に暗く、人通りも冬の寒さもあって少ない。そんな場所に少女が一人。誘拐されても文句が言えない状況だった。しかし、まだ幼い少女にｓの事が理解できていたかは分からない。いや、理解していなかったからこそ。このような事が起きてしまったのかもしれない。

背後から忍び寄る黒い影、その影は小太りした中年男性を彷彿とさせていた。男は次の瞬間少女の頭に向かって黒い布製の袋をかぶせた。

「ムグゥ!?」

「へへっ、可愛い子じゃねぇか。こんな時間に一人でいるとは馬鹿だなぁ」

――こんな場所に来なけりゃ、こんな目に合わずに済んだのに。そう、言外にいっているようだった。あらかじめ用意していたのだろう。紐で少女の手足をささっと縛る

と米俵の様に担ぎ上げ、何処かへ連れ去ろうとする。

この男、裏では有名な子供専門の誘拐犯だったりする。子供専門と言う言葉からも分かるように主な顧客がロリコン、ショタコンを三次元で愛してしまう業の深い裏の人間の為に子供を攫っていた。

「――――――――――――――――――――!?――――――――――――――――――――!」

「何を言っているか分からないなぁ。結構綺麗目だしいい値で売れるぞ」

「別にやめろとは言いませんけど、僕も目の前でやられるのは不愉快ですね」

「!?」

男は背後から掛けられた声に驚き勢いよく振り返る。そこには薄茶色の学ランにも似た服を纏う銀髪の西洋風の男子生徒だった。男は男子生徒の体の細さから体育系の生徒ではないとあたりを付け、ドスの効いた声を出す。

「オラッ！見せもんじゃねーぞ、餓鬼が。さっさと帰れ！」

「はぁ、最近の人間も随分と質が落ちましたね。最早家畜としてしか利用価値とか無いんじゃないですかねぇ」

まるで男の声を子犬が威嚇しているのを聞いているかのように受け流す銀髪の男子生徒。

舐められている。そう察した男は頭に血が上りポケットから折り畳みナイフを取り

出すと少女を担いだまま男子生徒に襲い掛かった。ナイフが男子生徒に刺さるそう確信した瞬間男の視界が暗転した。最後に見たのは呆れた様な顔をしながら金色の杯から泥の様なモノを垂れ流している男子生徒の姿だった。

「全く、人間同士で勝手に殺しあって滅ぶのは僕としては勝手にしてほしいですけど目の前でやられたらねぇ。流石に止めますよ」

偽善ですけどね。そう言って自嘲しながら少女の頭にかぶせられていた袋を脱がす。その行動にビクッとした少女に男子生徒は全く気にした様子もない。目の前でやられても気分が悪いから。そんな理由で助けたのだからと王善と言えば当然なのだが。

「さっ、今回の事は悪い夢だったとでも思って早く家に帰りなさい。それが貴女の為ですよ……あ、良い事思いつきました。ちょっと待ってください。折角聖夜ですし、プレゼントを……ランサー」

男子生徒がそう言うと男子生徒の右手に赤と緑のリボンの付いた長槍が現れた。男子生徒はそれを空へと掲げ詠唱を開始した。

「聖なる夜、ステキでムテキなキセキの一瞬。優雅に歌え、かの聖誕を（ラグ・ラス・フィー・ユ・ノエル）」

その言葉を発した瞬間何処からともなく沢山のプレゼントが降ってきた。それは巨大なテディベアであったり、ターキーだったりと多岐にわたった。男子生徒はその中から手ごろな物を探し始めた。

「これとかよさそうですね」

そう言って男子生徒が手に取ったのは透明で、光を通すと虹色に輝く石の入ったブレスレットだった。満足げにそれを見ていた男子生徒は他のプレゼントを消した。少女が「あっ」っと言っていたがお構いなしだ。

振り返った男子生徒はそのブレスレットを少女に手渡した。手渡されたブレスレットに少女が目を白黒している中、男子生徒は口元に人差し指を置き「この事は秘密でお願いしますね？それと、それは僕からのプレゼントです。メリークリスマス」とだけ言うと何処かへ消えてしまった。

事態に全く追い付いていない少女は自分が知らぬ内に自分の家の前に居る事に気が付いた。その事にも驚きながら少女は貰ったブレスレットを胸に抱き「ありがとう」とだけ言った。

迷宮の地下　出発

どうにか混乱から復活した八重樫と白崎は頬を染めながらフェリドとハジメに謝った。曰く、早とちりし過ぎたと。

「まぁ、過ぎた事はこの際気にしない様にしましょう。それで、僕も少しこの近辺を探索したんですけどどうやら上に上がる階段らしきものは無いようですね。下に下がって攻略するしか此処から脱出する手立てはなさそうです」

「でも、武器はどうするの？私はその……片腕がないから満足に剣は振れないわよ？」

「僕も、落ちてくる時に何処かに落としたみたいだし。丸腰だよ？」

その通り、現在の状態はフェリドが鬼呪装備と一級武装。八重樫の西洋剣、白崎の杖は半分に折れている為、使えるかどうか分からない。所謂手詰まりの状況に近かった。

「あぁ、それに関しては追々考えます。とりあえず、ハジメには僕の剣を渡しておきますよ」

「あの銃じゃないの？」

ハジメはここで疑問を呈した。銃の方が自分は役に立つのではないかと。それに対

し、フェリドは苦笑いと共に理由を話した。
「いえ、あれらの武器は強い精神力が必要でしてね。無かったらここの魔物より恐ろしい鬼になってしまうんですよ。武器に精神を乗っ取られてね」
「えっ、それってバートリー君は大丈夫なの？その……乗っ取られたりとかは……」
　ここで白崎が口を開いた。先ほどの言葉を聞いて少し不安になったのかもしれない。確かに、フェリドはそんな鬼呪装備を多用していたから言い訳は出来ないのだが。
「大丈夫ですよ。私は契約してますから、それに精神力は結構強いですよ？」
「「契約？」」
　フェリドが安心させるために言った言葉に三人から疑問の声が上がった。フェリドとしては常識的な事だが三人からしてみれば未知なのだ。此処に来て知識の差が出てしまった。まぁ、年齢的なモノも関係しているのだが。
「えぇ、この武器……鬼呪装備って言うんですけどね？鬼の呪いと書いて鬼呪と言うんです。武器一つに封印された鬼が一人が宿っているんです。で、その鬼と契約することで強力な力を振るうことが出来るんです。まぁ、精神力が弱いと鬼に飲み込まれて自身が鬼になるんですけどね」
「えぇ？」

安心させるために言った言葉は逆に不安にさせるような言葉で、三人は余計に心配する。それをフェリドはのらーりくらーりとかわしながら、論点をすり替え一刻も早くこの迷宮を脱出する事を提案した。

「そもそも、僕がサーヴァント召喚してるんで問題は無いんですよ?とりあえず、八重樫の腕とハジメの武器の目途が立つまでは僕とサーヴァントでどうにかしますから。安心してください」

フェリドにそう言われ三人は渋々了承し、歩みを進め始めた。

フェリドたちが居た階層は洞窟の様な場所だ。故に壁から敵が出てくることは無いが、穴があればその限りは無い。なら穴を視認できるかと言うと最低限の光源しかなく、どうしても穴は見落としてしまう。故にフェリド達は左右を頼光とイシュタル。先頭をジャック、最後尾をフェリドが歩くようにして三人を囲んでいた。

ハジメは目立った外傷はないものの元々職業が『錬金術師』なため、ステータスが低く武器もない状態。白崎は武器となる杖があるが全身を火傷した事もあり、すぐさま戦線復帰できるとは言い難い。そもそも、白崎はハジメと同じ非戦闘職と言われると何も言えないのだが。八重樫は左腕の消失によって体のバランス感覚が狂っている為、今は白崎に支えられながら歩いている。因みに、武器は腰に差していたためある。しかし、落ちてから一度も抜いてないので損傷具合は不明。

不安要素を抱えながらフェリド達は前に進む。途中幾度となく魔物の襲撃を受けたが百戦錬磨の英霊と地球代表の化け物の前にはチリ屑と同じだった。フェリド達は難なく落下場所の階層をクリアし、先へ進んだ。